

中世文書を読む(十一)
史料から見た草戸千軒

今回の『中世文書を読む』は、「草戸千軒」について記した文書を紹介し、解説します。中世文書から「草戸千軒」のどんなことが分かるのでしょうか？

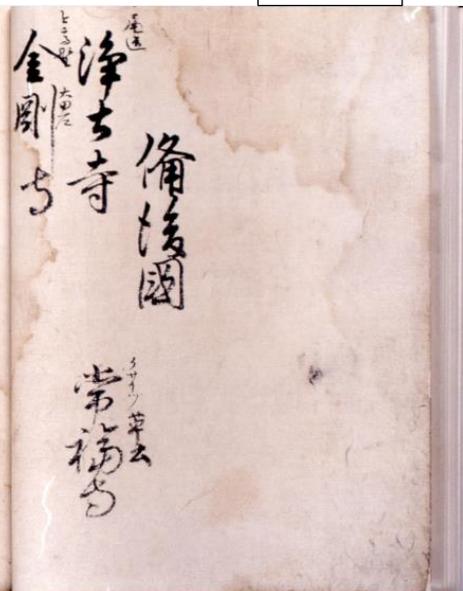


① 史料1は、

奈良の西大寺の末寺のリストです。この史料の奥(最後)に「明徳二年九月廿八日 書改メテ」とあり、明徳二年(1301)段隠の西大寺の末寺を、このように確認したことが知られます。



史料1



尾道
浄土寺
クサイツ草土
常福寺

備後國

今高野 大田庄
金剛寺

② 明徳2年(1301)頃、

備後國の「クサイツ 草土」に、西大寺の末寺の「常福寺」があったことが分かるよ。

常福寺は、今の明王院の前身寺院。つまり、今の明王院のある現在の福山市草戸町の辺りは、14世紀の末期には「クサイツ 草土」と呼ばれていたんだ！



③ 「クサイツ」を漢字で書くと「草田」。

「田」という字の訓読みは、古くは「タ」だった。(例1) おそく「タノ田」(例2) 市に「タノ田」の草木が、次第に、枝を張って上へ延び田に成るから、から、「田」という字ができました。文字であり、「草木が生い茂る田」だったので「タノ田」と呼ばれ、「クサイツ 草田」と記されるようになったのではないのでしょうか。



④ 常福寺の本堂は、元応3年(1321)の建立。

五重塔は、貞和4年(1348)に「文勸進之小資」(わずかばかりの寄付)が集められて建てられた。「クサイツ 草土」に住む人々が、「クサイツ 草土」を訪れる人々が、仏様の加護を求めて寄付したのでしょね。

「クサイツ 草土」は、本堂や五重塔の建つ常福寺が宗教活動を営めるくらい、たくさんの方が住み、たくさんの方が訪れる「まち」になっていたんでしょね。



史料2

備後国尾道権現堂が

熊野那智大社の御師、廊之御坊へ引率し案内する檀那の皆様
御調郡内の河南・河北一帯
新庄の内今津・今伊勢一帯
御調郡の内五ヶ庄の内一帯

この内、歌島は惣持院が引率案内する。

同じく山南・山北一帯

草出津の神上寺跡の裏側の檀那(信者)の皆様

木来・栗原・吉波一帯

このほか権現堂が案内する人は、神村の人を除き、廊之御坊へ御案内します。

尾道権現堂

文明十七年(1485) 閏三月二十九日 大進(花押)



⑤ 史料2は、文明17年(1485)に、

尾道の権現堂(今の千光寺)の大進といってお坊さんが熊野那智大社へ引率し案内する「旦那」(信者)たちを記したものです。

「草出」の「津」(港)には、かつて「神上寺」があったといわれています。

しかし、文明17年(1485)には、寺は無くなりの「跡」になってしまっています。

⑥ 神上寺は無くなったけれど、

寺跡の裏側の信者たちは、
全く尾道の権現堂の大進に引率されて
熊野那智大社へお参りしたよ。

おそらく、神上寺が「草出」の「津」に

あったときには、神上寺のお坊さんの引率で
熊野詣をしたのでしょね。

史料1の「常福寺」が「クサイツ 草土」に
あったことが合わせて考えると、

「草出」の海側が「津」、
山側が「草土」と
呼ばれたと推定されるよ！



⑦ 史料1・2から、15世紀後半には、

常福寺の本寺の西大寺や、
神上寺・尾道権現堂が先達(案内人)を
務めた熊野那智大社など、
近畿地方の大寺社が

自分たちの信仰を広めようと、

「草出」の「草土」や「津」で
活動していたことが推定されるよ！

「草出」は、このよつな大寺社が
宗教活動を盛んにするのにならわしい
ところだったのよ！



⑧ 次に、史料3は、

福山市鞆町の安国寺の本尊、
木造阿弥陀如来立像の胎内(内部)から
見つかった資料です。

一緒に見つかったお経などから、

この仏像が、文永11年(1274)に
安国寺の前身の善光寺の本尊として、
今の長野県の善光寺の本尊をまねて
造られたことよ、

史料3が、そのとき寄付を募ったノート
(勸進帳)であったことが分かりました。



史料3

せんくわうしのによらいのすくめの事

二百文 おたのよしむね

二百文 たんちのためむね

(中略)

廿一日

百文 あそんののぶつね

百文

三百文

(後略)

きのくりひろ **くさいづつ** 殿
きん

※ 文永11年(1274)は、どんな年・・・?
元寇(文永の役)のあった年。
この年以前から、元(モンゴル)軍は
日本(鎌倉幕府)に使者を送り、
武力によって国交を迫っていた。
そのため、不安な世の中となっていた。



⑨ 「わらわ」は、
漢字で書くと「草田」となるので、
「わらわ」も「草田」のことだと思っよう!
「わらわの殿」と
「きの のすゝゝ」って人が
合わせて「三百文」を寄付したんだ。
今のお金にして、約3万円。

⑩ 社会不安が続く中、
「わらわ」(草田)の人の中心で、
金吾寺の阿弥陀仏を造る事業(賛同)を
寄付した人がいたのね!
このような人々の行いの延長線上に、
常福寺五重塔の建立のため、
「一文勸進之小資」(わずかばかりの寄付)
を積むという人々の動きがあったのよ!



⑪ 13世紀中頃には、
「わらわ」(草田)と輛の人々が
交流していたことが知られます。
15世紀後半の「草田」には
「津」(港)がありました(史料2)。
輛も著大な港町でした。
したがって、
「わらわ」(草田)と輛の間の交流は
船を利用することが多かったでしょうね。



⑫ 最後に、史料4は、
貞和6年(観応元年11350)12月に、
周防国(今の山口県東部)の内藤氏が、足利直冬に殉じた軍忠
状です。
足利直冬は、足利尊氏の妻子で、後(尊氏)の弟の直義の養子
になります。
この年、尊氏と直義が対立し、争いを始める(観応の擾乱)
と、直冬は直義に味方しました。
このとき、内藤氏は、直冬のもとに馳せ参じたのでした。

史料4

内藤肥後徳益丸の代わりに審寛が謹んで言上する。
早く慣例に従って、一つは軍忠により、また一つは現在支配してい
る事実により、次の地頭職を安堵(保証・承認)する御下文を頂戴し
て証拠資料として備えたい。
(中略)
右の所領は、徳益丸が重代相伝し、現在も知行(支配)しているこ
とは相違ない。右大将(源頼朝)家以来の御下文や代々受け継がれた
文書(正文)等を備えてお届けすべきところ、通行が困難なため、持
参できない。
そこで、厚東周防権守が正文と照合して間違いないという証明をコ
ピーの裏面に記して、報告されたところである。死亡した父内藤肥後
孫六盛信は、去年(1349年)備後国(の輛)へ(足利直冬が)御
下向された最初から草津に馳せ参じ奉公の忠節をし、尾道へも付き従
ったので、御感の御教書(感謝状)を頂戴した。そして、九月二日ま
で在陣したところ、反乱が再び起こったので、周防国へ下向した。
(後略)

※ 軍忠状とは・・・?
中世に、戦いに参加した武士が
自らの戦功(てがら)を書き上げて、
大将に提出した文書。
受け取った大将は、
その文書の奥(最後)や裏などに、
戦功を承知したことを示す文章を
載せる。
戦功をあげた武士が、
褒美をもらう際の証拠となった。



⑬ 足利直冬が、寛和5年（1349）4月頃に備後国鞆（今の福山市鞆町）にやってくる。
その最初から、内藤氏は「草津」に馳せ参る。
尾道へも付き添ったと記している。「草津」に集結したことが分かる。



⑭ 味方の軍勢が「草津」に駐留している情報が、鞆の足利直冬に届けられている。また、鞆の足利直冬が尾道に移動する情報が「草津」の軍勢に伝わっている。
これは、単に、情報が陣営内をスムーズに伝わったという点だけでなく、その前提として、鞆と「草津」の間を人やモノや情報が日常的に行き来していたことを示しているのではないかなあ。



⑮ 内藤氏が鞆の足利直冬に対して「奉公」の「忠節」をするために馳せ参じた「草津」とは、鞆に近う「津」（港）と書かれる。内藤氏の人々は、13世紀中頃から鞆と日常的な交流をうけてきた。「草津」とは「津」もあつた。以上のことから、「草津」とは「草（田）」の「津」の読みと推測されます。



⑯ 以上のように、「草田」は、多くの人が住み、多くの人が集う「まち」だった。この「まち」は、
13世紀後半には「くわいん」（史料3）、
14世紀中頃には「草（田）」の「津」（史料4）、
14世紀末期には「クサイツ」草上（史料1）、
15世紀後半には「草田」の「津」（史料2）のよう、中世文書に記録やわたす。このほかにも、次表のよう、中世文書に登場する。



⑰ 「草田」の山側が「草上」、
「草田」の海側が「津」「草津」なら、表のNo.4の「草井地」は、「草田」の「井地」（市）、すなわち草市と推定される。「草井地」と「鞆」（表のNo.4）、「草津」と「鞆」（表のNo.3）、「草上」と「鞆浦」（表のNo.7）のよう、「草田」は鞆と海陸のハブと推定される。

⑱ 発掘調査された「草万軒町遺跡」は、常福寺（現在の明王院）の東麓に広がる中世の港町の遺跡だった。
なので、表のNo.3（史料4）・4・4・8（史料2）に見られる「草田」の「津」（港）と「井地」（市）の集落の一部が、発掘された「草万軒」と思われます。
15世紀後半の表のNo.8（史料1）を最後に「草田」として地名は見られなくなりますが、おおよそ「草田」の「津」と「井地」（市）が連続して「草上」だけになっていったか、あるいは、なお、現在は「草上」と記されています。